東奥に生まれた日本の国士　本多庸一（ほんだ よういち）

一九一二年（明治四十五）四月六日は、朝から春雨がこやみなく降り続いていた。午後二時、東京青山学院の講堂では、先月二十六日、長崎で亡くなった本多庸一の葬儀が、しめやかに、しかも盛大にとり行なわれていた。その後で行なわれた追悼会では、友人、知人が次々に立って庸一の思い出や人となりを語ったが、宗教家の内村鑑三は「宗教家として偉大だった本多君は、また政治家としても立派な手腕をもっていた。彼に若し政治的な野心があったなら、おそらく日本一の衆議院議長になったであろう。」と述べた。また友人の押川方義（まさよし）は「本多君は、一教会を興して得々としている人ではない。一大学を建てて満足する人でもない。本多君は国士である。天下の重大事を託し得る人である。人は本多君を基督教化せられた武士だと言うが、私は彼のことを、武士道化せられたクリスチャンであると言いたい。各国にはそれぞれのキリスト教があるように、日本に武士道化した基督教があるのは当然である。」と、力をこめて語った。

菊池九郎とともに〈本県における明治維新の二偉人〉と呼ばれる本多庸一は、宗教家として、また教育家、政治家として、まさに津軽が生んだ偉大な人物である。

一八四八年（嘉永元）十二月十三日、庸一は、津軽藩士本多東作の長男として、在府町に生まれた。幼名を徳蔵といった。この本多家は大

変由緒のある家柄で、先祖は、深津作兵衛親久（本多豊後守の子）といい、徳川家康に仕えていたのだが、家康の養女である満天姫が、二代藩主信枚に嫁入りした際、満天姫に付いて津軽へ下り、その儘津軽藩の家臣となったのである。

三代深津安左衛門の時、先祖の姓の「本多」を名のるようになったが、九代目の東作は、三百石取の藩士であった。

生まれつき聡明だった徳蔵は、十歳の頃、藩学校の稽古館に入学したが、その頃すでに「大学」「中庸」「論語」「孟子」という難しい漢籍を、すべて暗誦できるほどになっていた。七人弟妹の長男だった徳蔵は、よく弟や妹の面倒を見た。だから親や祖父も、才能豊かで思いやりのあるこの徳蔵を本多家の跡とり息子として、大いに頼りにしていたのであった。

当時の世の中は、勤王派（薩長方）と佐幕派（徳川方）の二派に分かれ、互いに相争うという混沌とした時代で、徳蔵や喜代太郎（菊池九郎）らの青年武士は、佐幕派である津軽藩の代表となって、庄内藩（山形）と同盟をとり決めるなどの仕事に走り回っていた。ところが、津軽藩が土壇場になって勤王派に乗り換えたことから、あくまでも佐幕派を主張する徳蔵等は宙に浮いた存在となり、死を決意して脱藩するが、彼等の才能と行動力を惜しんだ藩主（承昭公）は特にその罪を許し、帰藩を命じたのである。（「菊池九郎」の稿参照）

徳蔵から庸一と改名した本多は、一八七〇年（明治三）、藩の命令で県外留学をすることになった。藩では、激しく移り変わる今の時代に遅れないために、前途有為の青年たちのなかから、能力のあるものを選抜し、先進の藩へ送って、新知識を吸収させようとしたのである。

菊池九郎は鹿児島の英学校へ、庸一は長州（山口県）まで行くつもりだったのだが、彼はその目的地を横浜にかえた。というのは、かねてから、洋行の希望を持っていた庸一は、長州よりはこの横浜が、その機会が多いだろうと判断したのである。

庸一は、英学（語学）を学ぶために、宣教師のブラウン夫人の塾に入った。士族の家に生まれ、幼い時から漢籍や武道を習ってきた庸一にとって、キリスト教は全く関心のないものだったが、語学を学ぶには外国人が一番良いということで、英語修得という、ただそのために入学したのである。今はこうして外人から教えを受ける身だが、いずれは必ず追い越してみせるぞ、という意気込みで、庸一は学問に打ち込んだのだが、朝夕ブラウン夫人へ接しているうちに、夫人の崇高な人格や、その伝道にかける情熱に心を動かされるようになり、庸一自身も次第に宗教に関心を持つようになったのである。ところが翌一八七一年（明治四）、廃藩置県が実施されるや、留学生に対する援助の資金が続かなくなり、やむを得ずみな帰郷することになった。学業を中断されて落胆している庸一を見た父は、代々家に伝わる刀剣や書画を売却して資金を作り、それを旅費や学費として与えた。喜んだ庸一は、翌年再び横浜に赴き、ブラウン夫人のもとで勉学を継続することができたのだが、庸一はその年の五月、ついにキリスト教徒としての洗礼を受けたのである。二十三歳であった。

日本で切支丹禁止令がとかれたのは、一八七三年（明治六）二月のことだから、庸一の洗礼はその約一年前ということになる。それにしても、当時のキリスト教は、異国の人々の信じる邪教として、日本人の間にはあまり浸透していなかった。いや、切支丹伴天連（バテレン）として懼（おそ）れられ、

毛嫌いされた江戸時代の名残りがまだあった。だから入信するには、相当の勇気を要したのである。しかも武士階級の子弟の入信は、特別に困難が伴なった。親からの勘当、そして自ら出世の道を閉ざしてしまうという覚悟が必要であった。

弘前のある士族は、子供がキリスト教信者になったと聞いて大いに怒り、子供を岩木川に連れていき、首すじを摑(つか)んで水に浸け乍(なが)ら、

「邪教であるバテレンを信じるなど、ご先祖様の名を汚すものだ。このわしが禊(みそぎ)をしてその汚れをとってやる！」

と叱りつけたという。そんな時代であった。

先祖伝来の宝物を売り払ってまで学資金を用意した父東作が、頼みにしていた庸一の入信を聞いて、大いに力を落としたのも当然のことだろう。

一八七四年（明治七）、庸一は乞われて、東奥義塾の塾長として赴任した。義塾を創設した菊池九郎が、かつての同士であった庸一の手腕と力に期待したのである。二十五歳という若き塾長であった。

庸一は、宣教師のジョン・イングを伴って弘前へやってきた。庸一はのちに「明治の初年、西洋の先進国に比し、著しく立ち遅れている祖国をして、いかにその水準まで高めることができるかが問題であった」と語っているが、諸外国に負けぬ立派な学校、すぐれた教育を実践し

ていくためには、まずよき教師が必要であると思ったのである。

イングは、熱心な宣教師であり、また秀れた教師であった。義塾では、破格の待遇でイングを迎えた。当時、日本人教師の給料が二円から五円というとき、イングには、住宅を与えた他に、百六十七円の給料を支給したのである。このような待遇をもってしても、是非必要な教師であった。このイングの来弘をきっかけとして、東奥義塾は無論のこと、弘前にキリスト教が広まる一つの機運ができたのである。

一八七六年（明治九）七月、東北各地をご巡幸なされていた明治天皇が、青森へ立ち寄られる際、東奥義塾の生徒たちが、英学の学習ぶりを天皇にお見せすることになった。この名誉ある生徒に選ばれたのは、珍田捨巳（のちの各国大使、侍従長）伊東重（のちの弘前市長、医師）佐藤愛麿（のちに各国大使）等十人の秀才達であった。

菊池九郎、ジョン・イングに引率された十名の生徒は、馬車に乗ったり、山道を歩いたりして青森へ出かけた。そして、七月十五日午前十時、青森蓮心寺でお休みの天皇の前で、彼等は堂々と、英語の作文、講演、英語の唱歌などを実演した。みちのくの果てのこの青森で、このような進んだ教育がなされていることに、天皇や随臣の者は大いに驚かれたという。生徒達は最後に「天皇頌歌」を英語で唄った。これは賛美歌五十番の歌詞を、天皇を讃（ほ）めたたえる内容に代えたもので、演出と指導はもちろんイングであった。生徒達のこの立派な実演に感嘆された天皇は、下賜金として生徒達に五円宛を与えた他、イングには、特別に拝謁を仰せつけたのである。

これらの内容については、天皇に随行してきた岸田吟香という新聞記者によって、逐一東京に送られ、東京日日新聞に掲載された。実はこの岸田、かつて横浜に於て庸一と共に学んだ間柄であったということで、格別好意的に紹介してくれたのである。このことから、東北の地弘前の東奥義塾の名は、一躍全国に知れわたったのである。

塾長であり、また牧師でもあった庸一は、毎日曜の午後、義塾の講堂で説教に立ち、伝道活動を続けていたが、生徒の他にも、一般人の参加者が多くなったので、一八七六年（明治九）の十月には弘前教会を創立した。この時長老として本多庸一と川村敬三が選ばれた。また翌十年には日曜学校が正式に発足、本多庸一が校長となったが、この時も多数の人たちが洗礼を受けている。

当時の入信者に、意外と士族出身者である知識階級の子弟や家族の多かったということは、先輩としての本多等の影響が大きかったと思われる。

教育と伝道に明け暮れていた庸一は、また一方では、菊池九郎と共に、「自由民権」の啓蒙運動にも加わっていた。これは、いわゆる板垣退助等が強く政府に要求していた、民選議院設立にかかわる運動で、当時、その気運が広く全国に広まっていったのである。そして弘前における民権運動の中心は、東奥義塾であった。

「東北の振るわないのは、気候や地理的条件の不利が原因ではない。団結心に欠け、知識が低いからだ。これを直すには、正しい主義を決め、これによって人々を団結させ、知識を深めさせるべきだ」

庸一等はこう主張して、この地方の後進性を払拭（ふっしょく）するためにと、この自由民権という、民主主義運動にも力を注いでいたのであった。こうして政治運動にも意欲的な活動をしていた庸一は、一八八二年（明治十五）に県会議員になるや、四年間、議長としてそのすぐれた手腕を発揮した。そしてこれまでとかく対立しがちだった津軽と南部の間をうまく調和させ、わだかまりを無くさせる事につとめたので、名議長本多の名は、いやが上にも高まったのである。

一八八八年（明治二十一）の九月、本多はアメリカに遊学した。三十九歳になっていた。一八七〇年（明治三）、藩に留学を命ぜられたとき、将来是非とも洋行しようと決めて横浜をえらんだ本多の、十八年目にして初めて実現した洋行であった。

アメリカに上陸した彼は、まずマサチューセッツ州ノースフィールドの伝道者夏期学校に入学した。その翌年の二月十一日、日本では帝国憲法が発布された。その内容をアメリカで聞いた本多は、大いに悩んだ。憲法によると、宗教家と代議士は兼ねることが出来ないというのである。牧師であり、教育家であり、その上政治にも関心のあった本多としては、今後どの道を選択するかが問題となってくる。しかも、憲法発布とともに国会開設の準備が始まり、わが国初の帝国議会が開かれるとあって、自薦他薦の代議士候補の名前がとびかい、政界は騒然とな

っていた。勿論、本多もその候補の一人になっていたし、東京の近衛篤麿公からは、至急帰国するようにとの連絡も届いていたのだった。

九月のある日、本多は、スクラントン市で、友人の岩村透と会っていた。岩村は、高知県の出身でのちに美術学校教授となった人である。彼は、将来の事で悩んでいるらしい本多を慰めようと、近くにある風光明媚（めいび）な、カムベルス・リッヂの丘に誘ったのである。

夕方頃、二人はピットンの駅までやってきた。その日は日曜日で汽車の通過回数も少なかったので、二人は線路を伝って、サスケハナ河の鉄橋迄やってきた。本多は、無言で夕暮れの田園風景を眺めている。その沈んだ様子をみては、岩村も何故か声をかけにくく、同じように黙していた。とその時、岩村は、背後に列車の音を聞いたような気がして、思わず振り返ってみた。疾走している汽車が、みるみるこちらに近づいてくるではないか。

「あぶない！　汽車が来たぞ！」

前を歩いていた本多の背中に、岩村は大声で叫んだ。然し、考え事をしている本多の耳には、その声が届かなかった。岩村は、鉄橋の端にいたが、真中頃にいる本多にはもう逃げ場がない。

「本多ァ！　危ない！　とび下りろ！」

鉄橋に人影を発見した列車は、何度も警笛をならした。本多が驚いて振り向いたとき、列車は轟音を立てて鉄橋を渡っていた。

列車の去ったあとを、岩村は鉄橋へかけ出した。

「おい、本多ッ、大丈夫か！」

本多は、枕木の端のほうに丸くなってうずくまっていた。岩村の声を聞いた庸一は、ニッコリと笑って立ち上がった。間一髪のところで助かったのだ。通過の際、上衣が車輪にふれたか、端のほうが裂けていた。まさに奇跡だった。

「風を切って進む列車のため、先生の髪の毛は、まるで秋風に揺れるススキのように波打っていたのを覚えています。このことだけでも、どんなに危険であったかが、よくわかります。」

岩村は、のちにこの時の事を、こう語っている。

文字通り、九死に一生を得た本多は、これを機会に心中深く決心するところがあった。今回のこの事件は、自分に対する神の警告である、と考えたのである。宗教界にとどまるべきか、政界に進むか、いろいろと迷ったが今こそはっきりした。政界をすてて宗教の道一筋に進むべきだ。それが神の声だ、と思った。本多はまもなく、ニュージャージー州マデソン市にある、ドルー神学校に入学した。本格的に神学の勉強を始めたのである。

一八九〇年（明治二十三）、青山学院長となった本多は、以後十七年間をキリスト教教育に捧げた。また日本各地を伝道旅行して歩きながらキリスト教新教各派の連合の中心人物として、その指導にあたった。

本多は、宗教家のみならず、政治家との交友もあったので、その来訪も多かった。日清、日露両戦役の時には、時の桂首相や小林外相の依頼で、欧米の各国を旅行しながら、日本の立場と行動を弁明し、各国の日本に対する理解と協力を説いて回ったのである。

「先生の考えを伺うために、政界の要人がよく訪ねてきていました。もしも先生が政界に進んでいたなら、おそらく一国の総理になっていたでしょう。」

のちに本多のあとをついだ高木任太郎青山学院長は、よくこう話していたという。

一九〇七年（明治四十）、青山学院長を辞した本多は、日本メソジスト教会の監督として、全国各地を精力的に伝道旅行して回った。北海道から沖縄まで、家庭をかえりみるいとまもない程に多忙な毎日だった。一日数回に及ぶ講演や演説、当時腰痛に苦しんでいた本多は、注射を打ちながらもこれを続けたという。

一九一二年（明治四十五）の三月、日本メソジスト教会第五回西部年会に招ばれた本多は、夫人とともに長崎へやってきたが、この時三十九度の高熱という状態だった。

本多は、医師の制止も聞かず、熱をおかして会に出た。そして倒れた。

三月二十二日、容体が悪化してついに入院した。チフスであった。病院長をはじめ、一同の必死の看護と祈りの甲斐もなく、二十六日午前十時三十分、遂に息を引きとった。今はのきわの本多は、熱にうかされながらも、何度となく「大計画、大計画」と叫んだという。本多の脳中をかけ巡った大計画とは、一体なんであったのだろうか。六十三歳であった。

一九一三年（大正二）十月、弘前市元寺町の日本キリスト教団弘前教会の庭に、大きな記念碑が建立された。石碑には、本多の愛弟子である岡田哲蔵（英文学者）の案文で、つぎのような言葉が刻まれている。

東奥に生れし　日本の国士
日本に生れし　霊界の大人

参考文献　岡田哲蔵著『本多庸一伝』一九三五年（昭和十）東京日独書院
青山学院編『本多庸一』一九六八年（昭和四十三）青山学院

出典：弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、六一 - 七一頁